

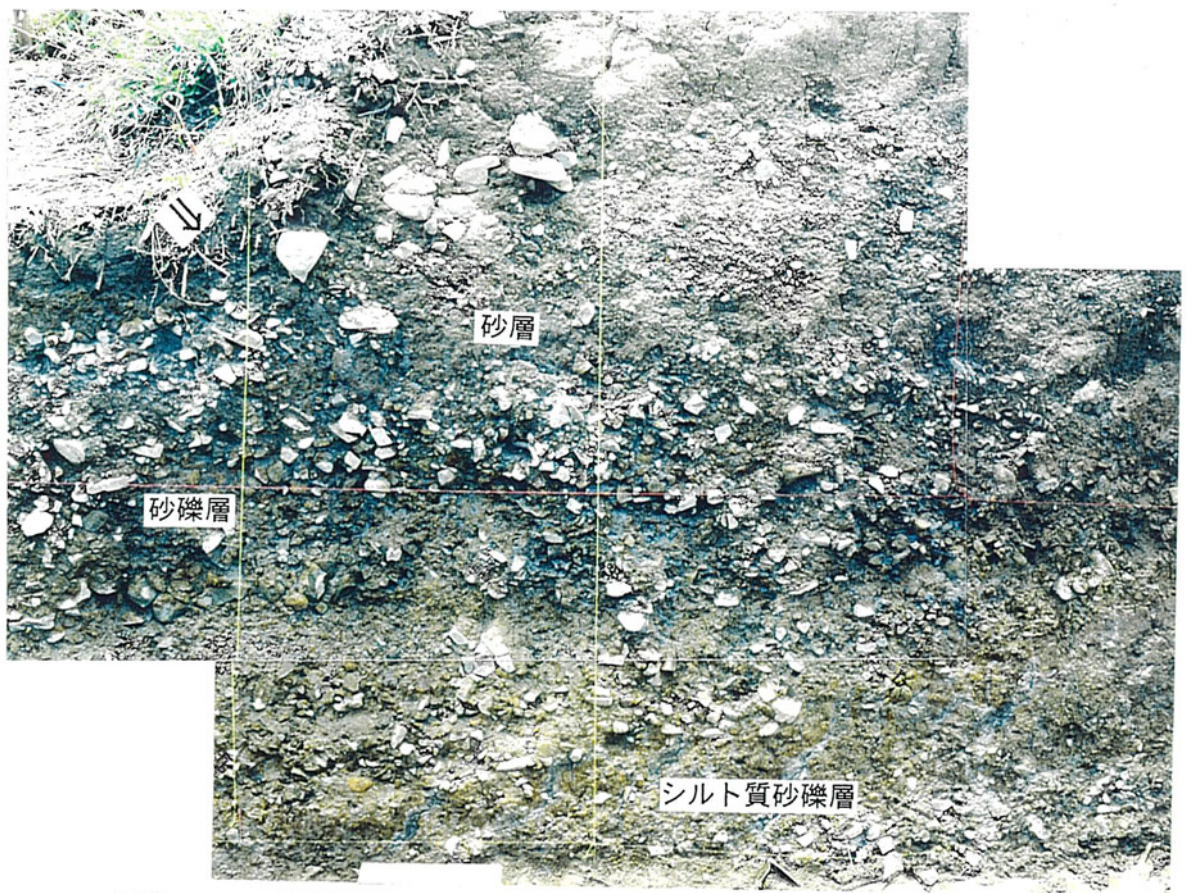


写真-12 西側壁面W 21 ~W 22.左上の低崖付け根から写真ほぼ中央にかけて、断層とほぼ同じ形態の地層境界がみられる。ただし、下側のシルト質砂礫層は変位していない。上盤の砂層はこの境界で途切れている。また、左側の礫層は境界の沿って礫が配列している。



写真-13 上記写真の拡大。地層境界に沿って粘土脈がみられる。



写真-14 地層境界沿いの粘土脈.

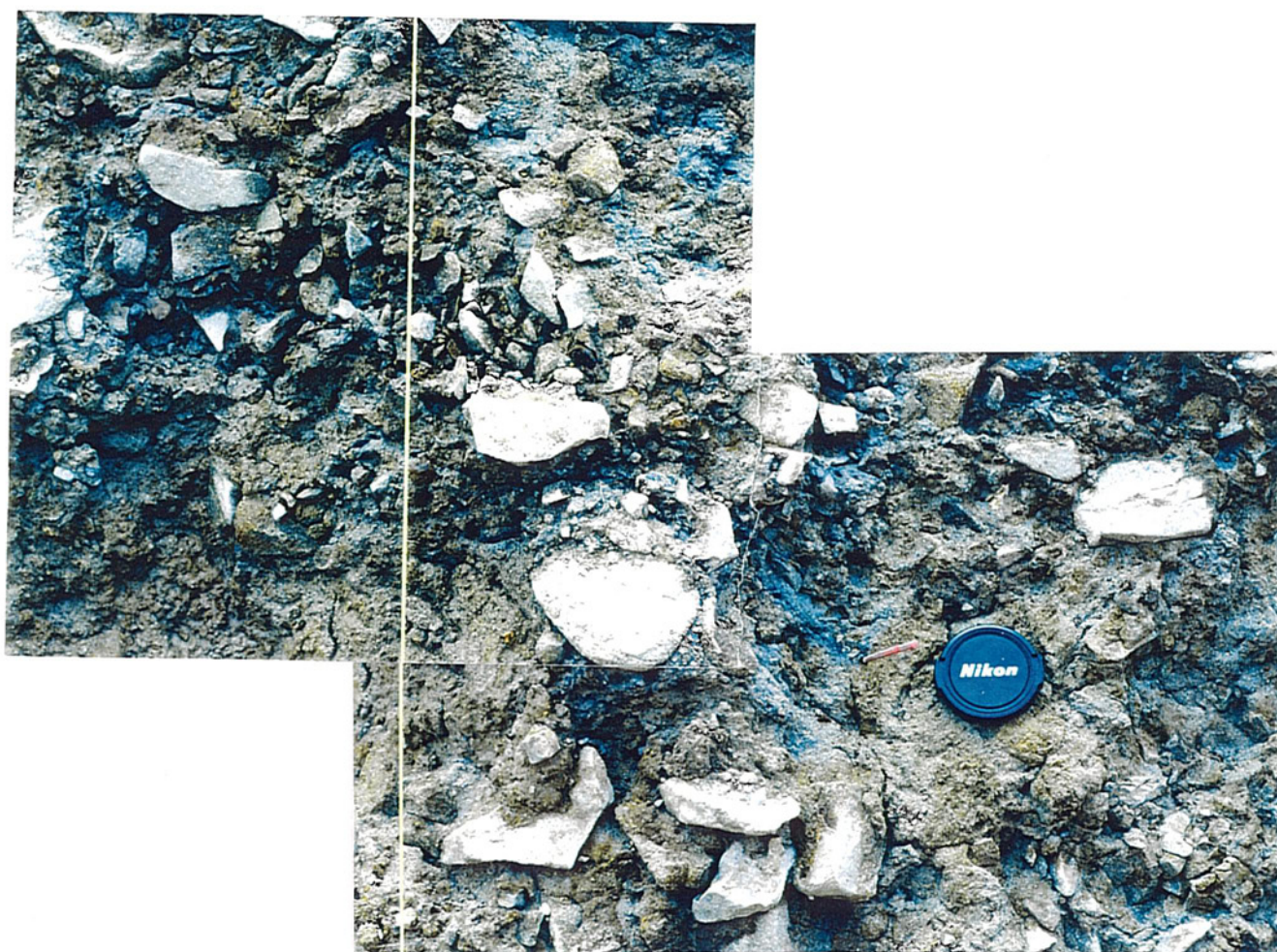
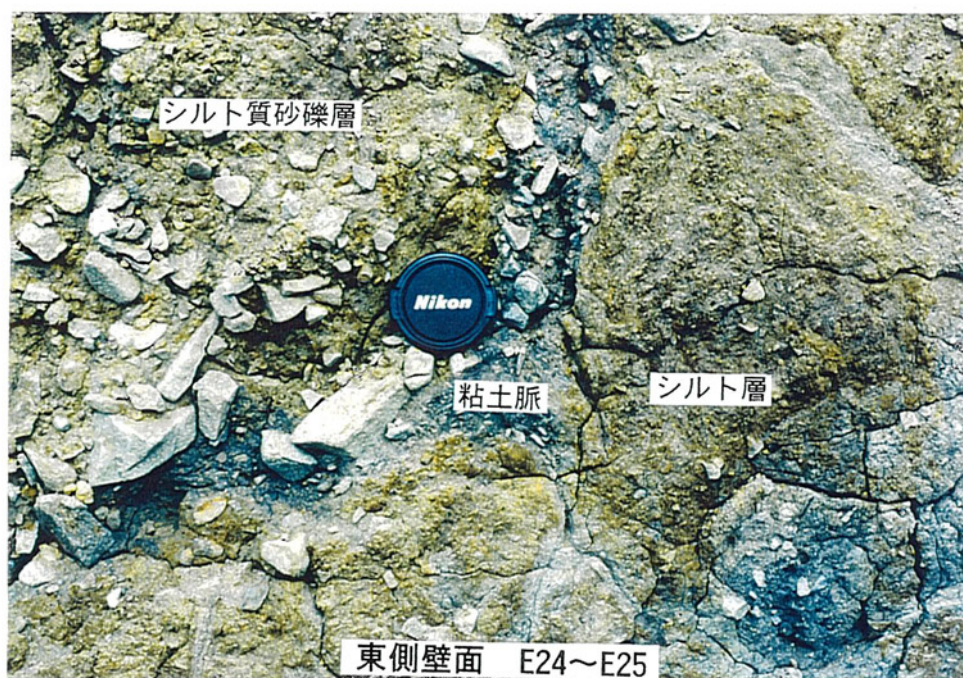
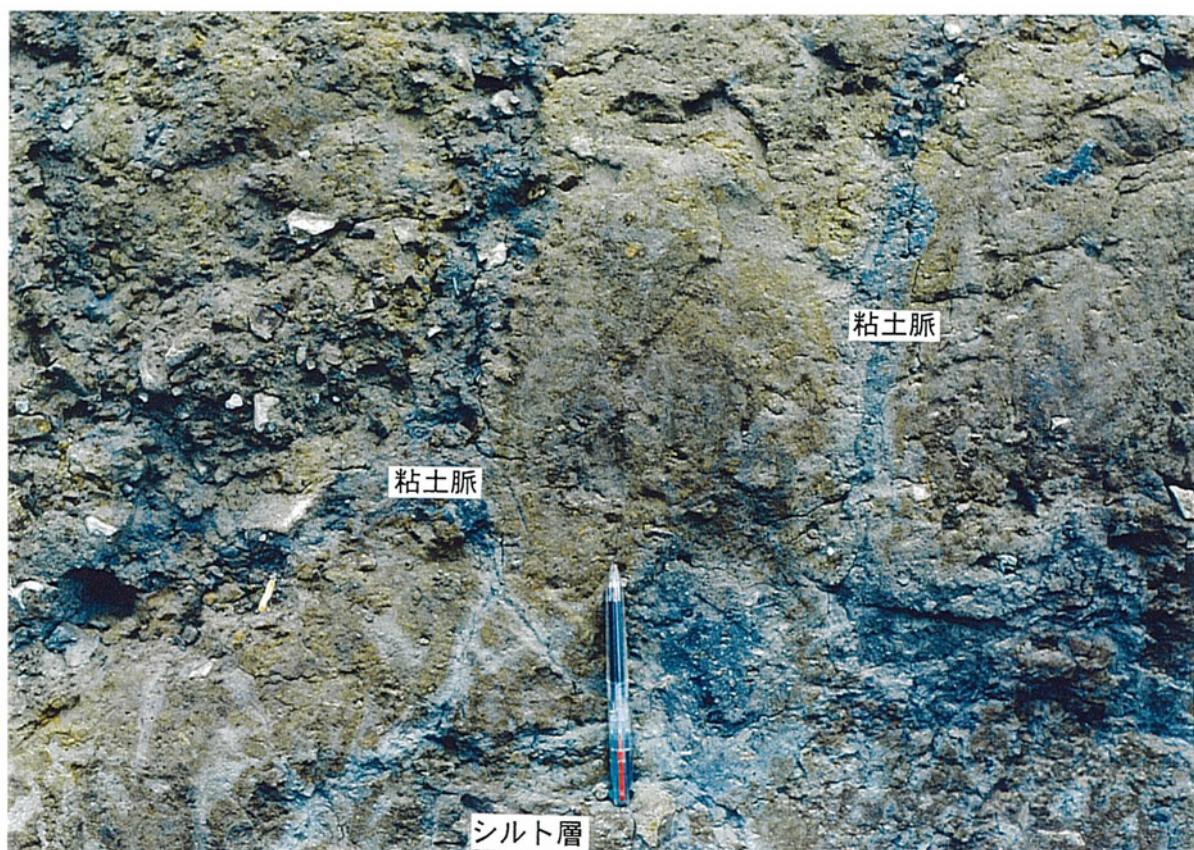


写真-15 同 上.



写真－16 ミニトレンチ東側壁面 E 24 ～ E 25.粘土脈はシルト層中で幅が狭いが、砂礫層では拡散する傾向がある。



写真－17 同 上.

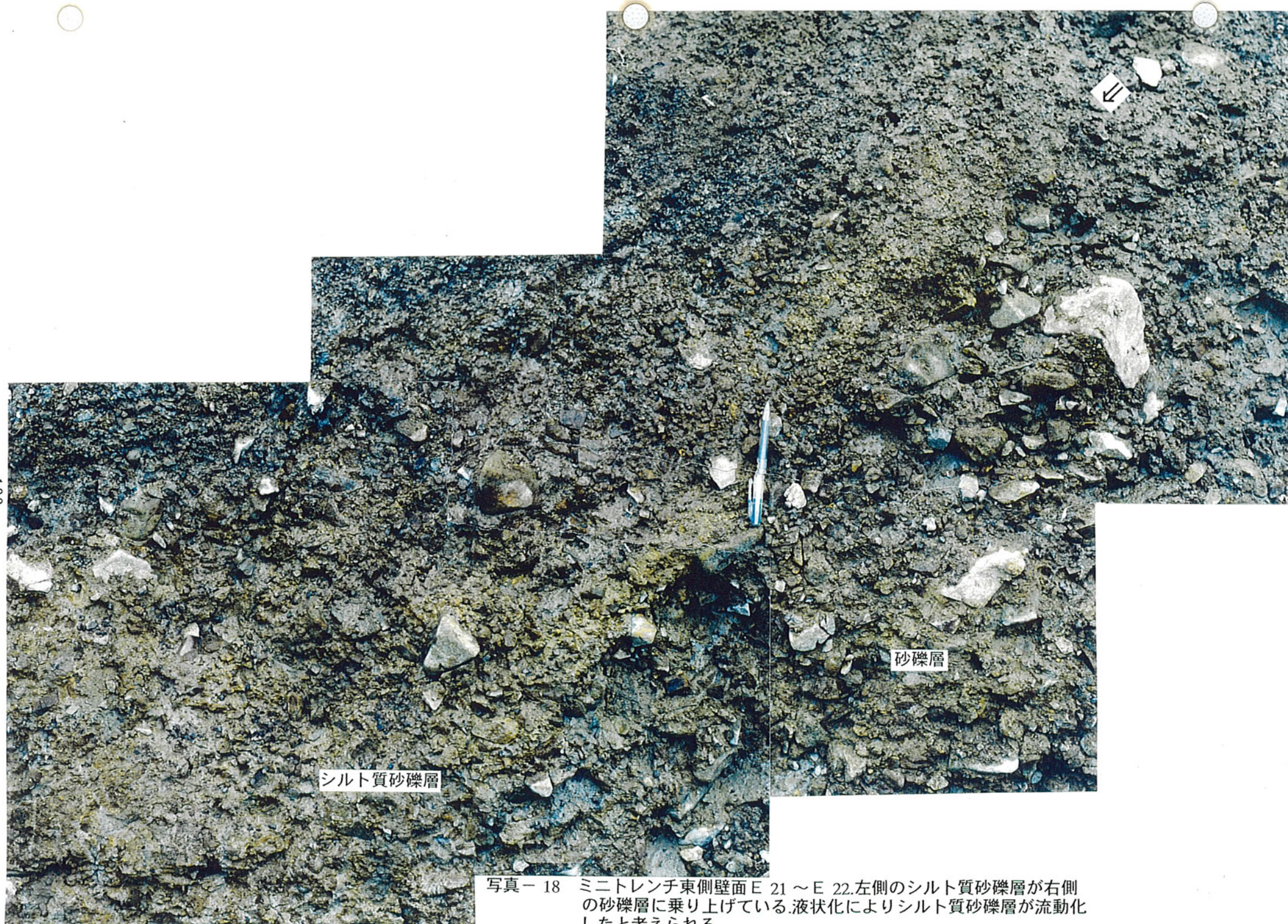
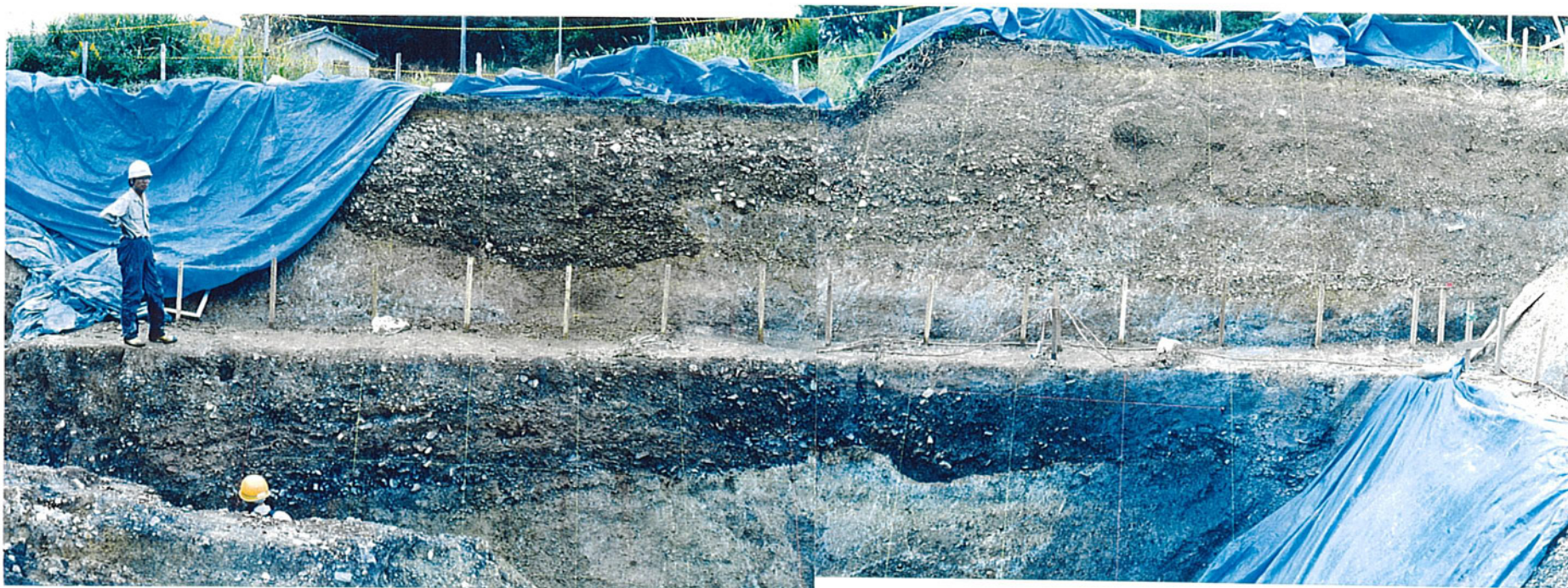


写真-18 ミニトレンチ東側壁面 E 21 ~ E 22. 左側のシルト質砂礫層が右側の砂礫層に乗り上げている。液状化によりシルト質砂礫層が流動化したと考えられる。



写真－ 19 西側壁面全景.壁面上段ではシルト層が変位しているが,下段には連続していない.

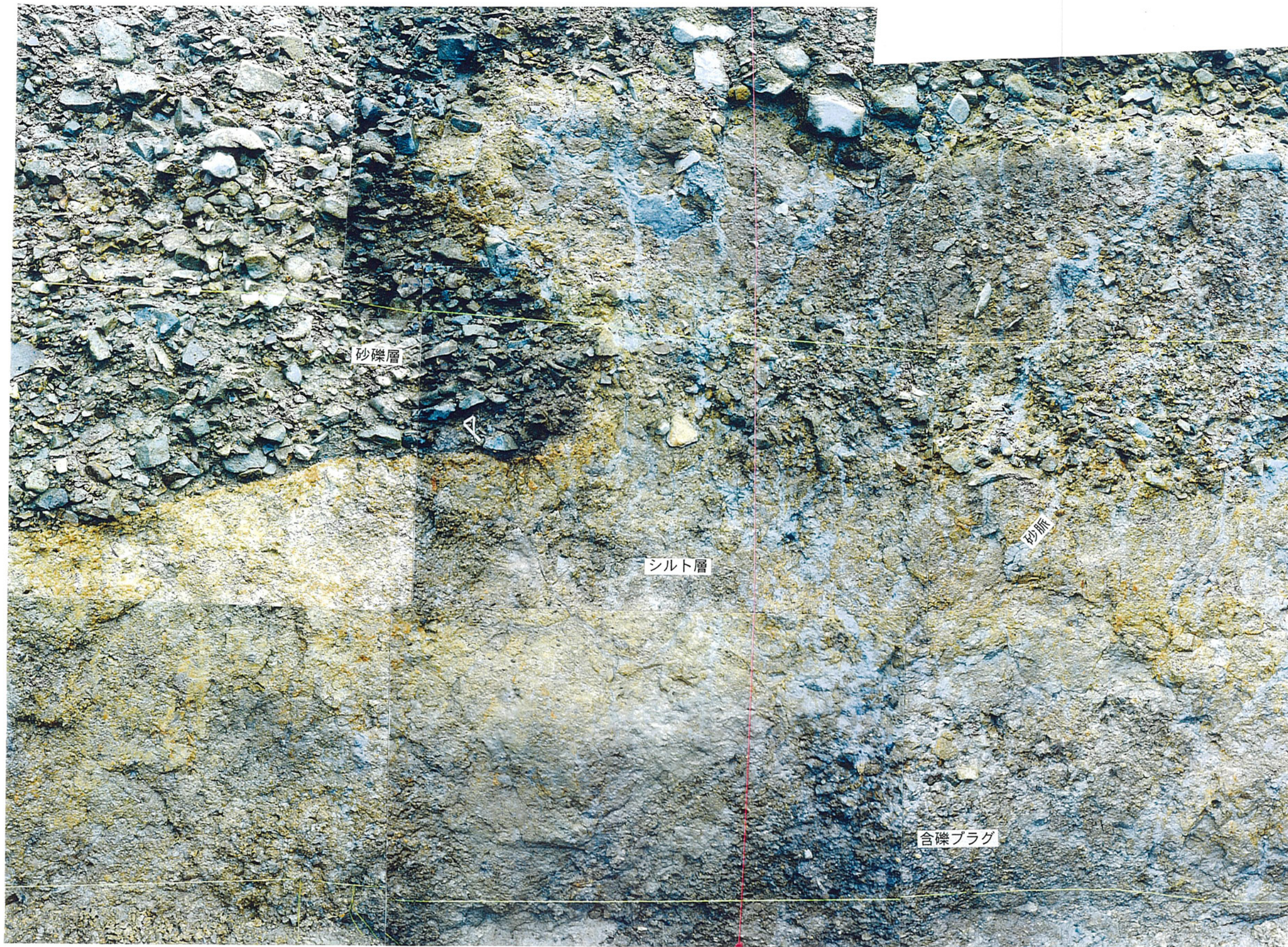
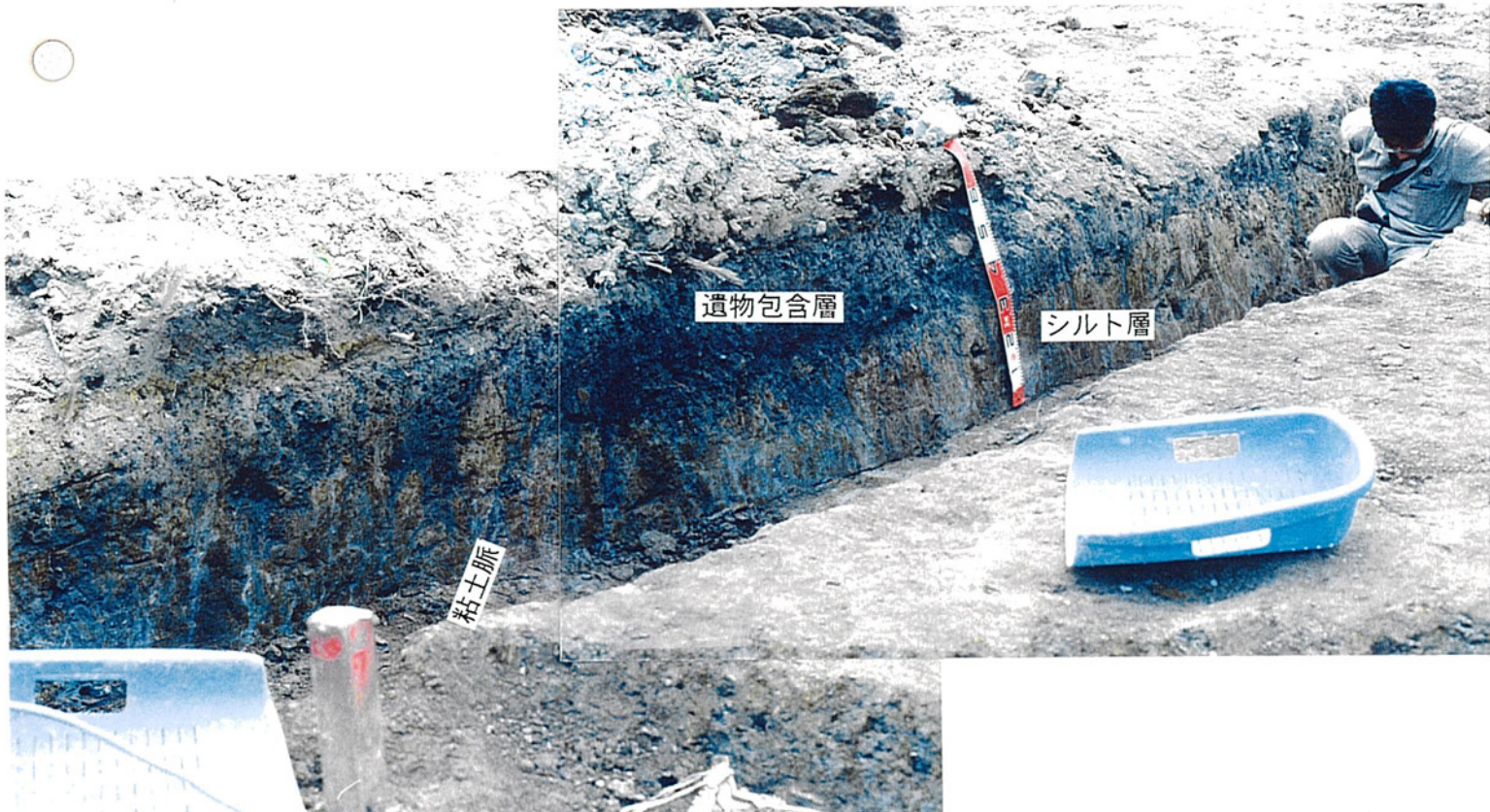


写真-20 液状化によるシルト層の流動化。シルト層は約 60cm 変位している。
右下の礫層は含礫プラグの一種と考えられ、その上端面から砂脈
が上方に伸びている。

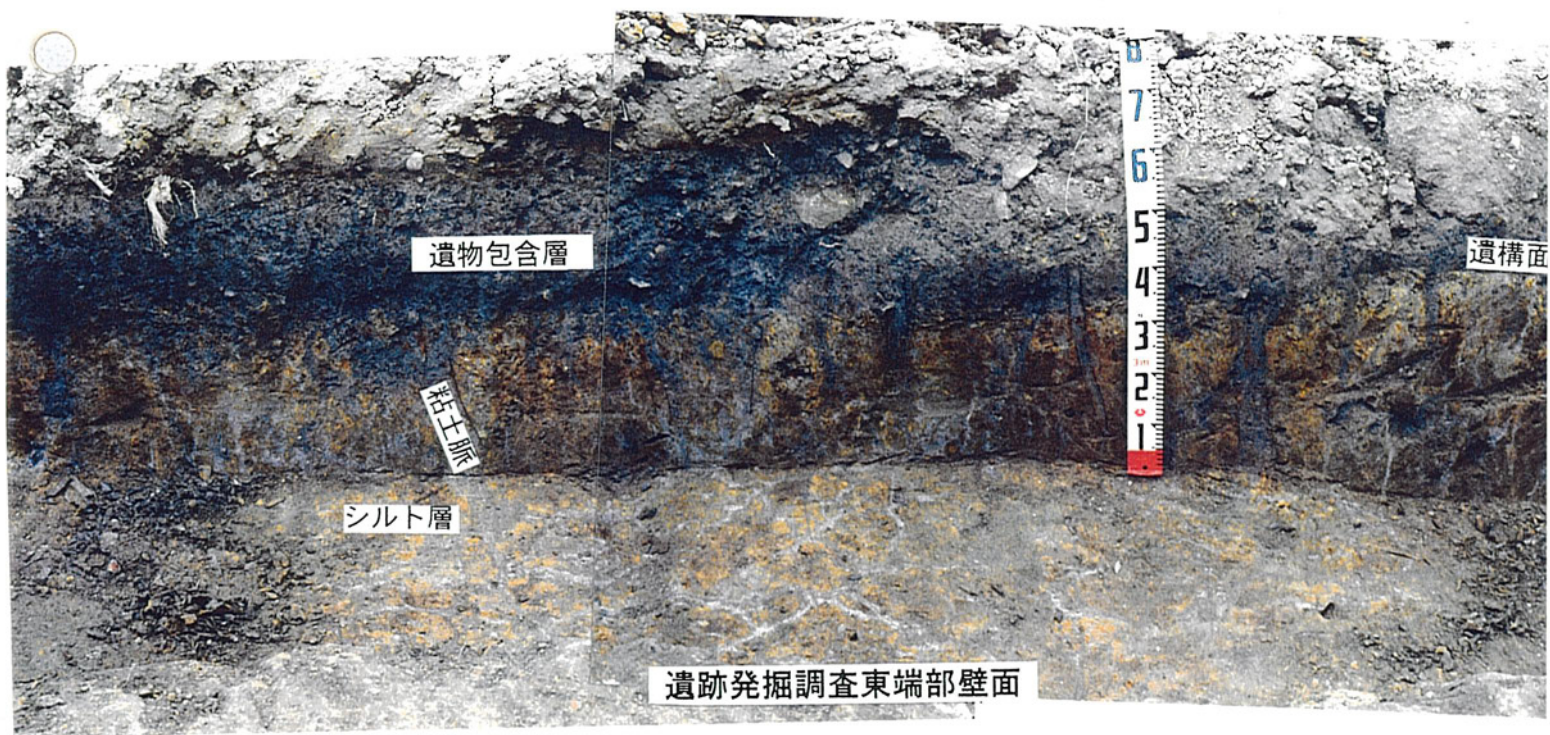


写真－21 トレンチに先立ち行われた遺跡発掘調査で現れた地層断面.黒色の部分が遺物包含層.その下の黄褐色の地層がシルト層.遺物包含層の基底面は凹凸に富んでおり,地震に伴う液状化・水圧破碎により変形したと考えられる.

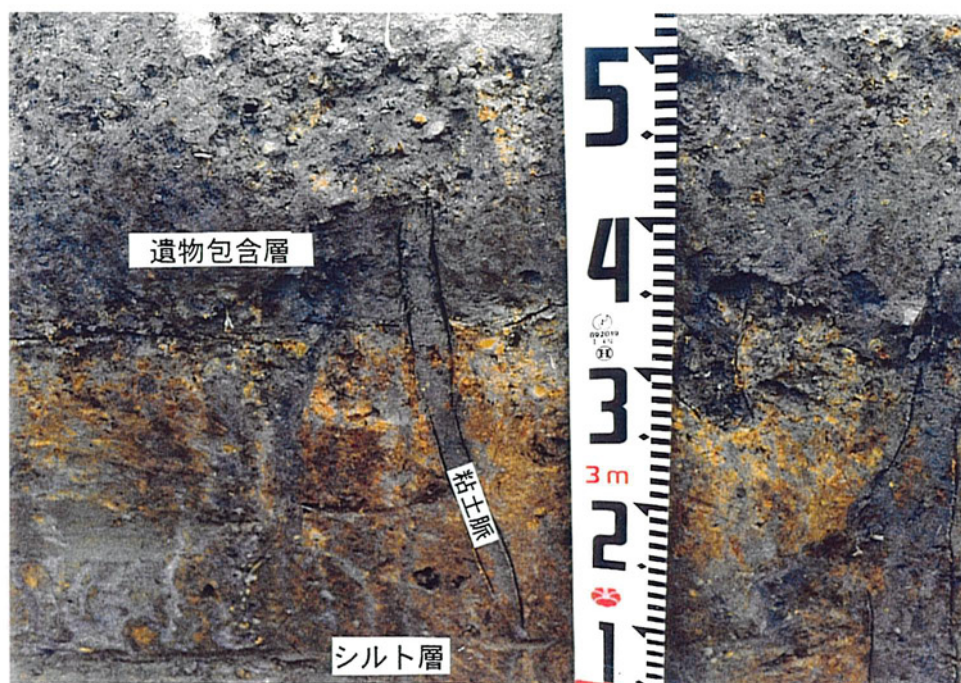
遺構面 ⇒



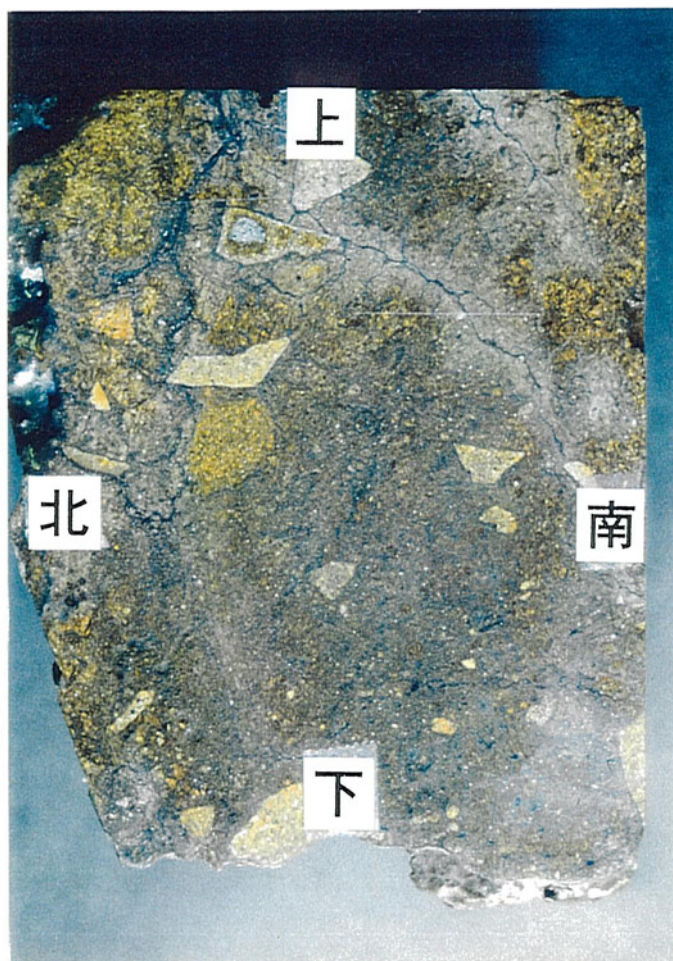
写真－22 同上.遺物包含層とシルト層の境界が遺構面になっている.土器片から遺構の年代は鎌倉・平安時代(8～9世紀)と考えられている.シルト層中の粘土脈は遺物包含層に達している.



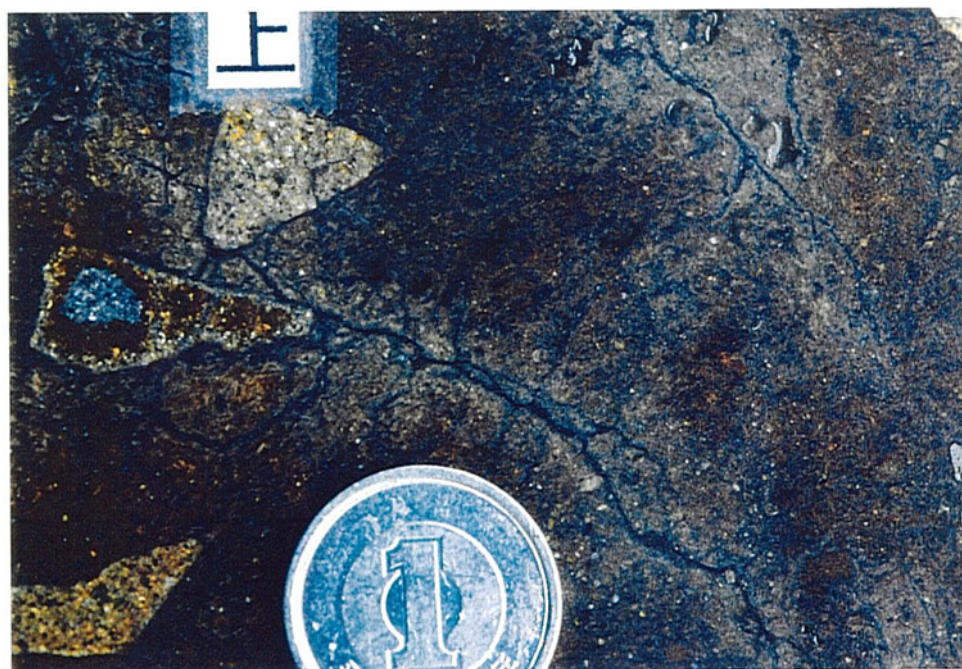
写真－23 遺跡発掘調査の地層断面.粘土脈は遺物包含層に貫入している.



写真－24 同 上.



写真－25 シルト層を固化し、研磨した面。粘土脈は多数に枝分かれしており、先端部はシルト層中で消滅している。粘土脈は乾燥等によるクラックを上部から充填したものではなく、水圧破砕で形成されたと考えられる。



写真－26 同 上.

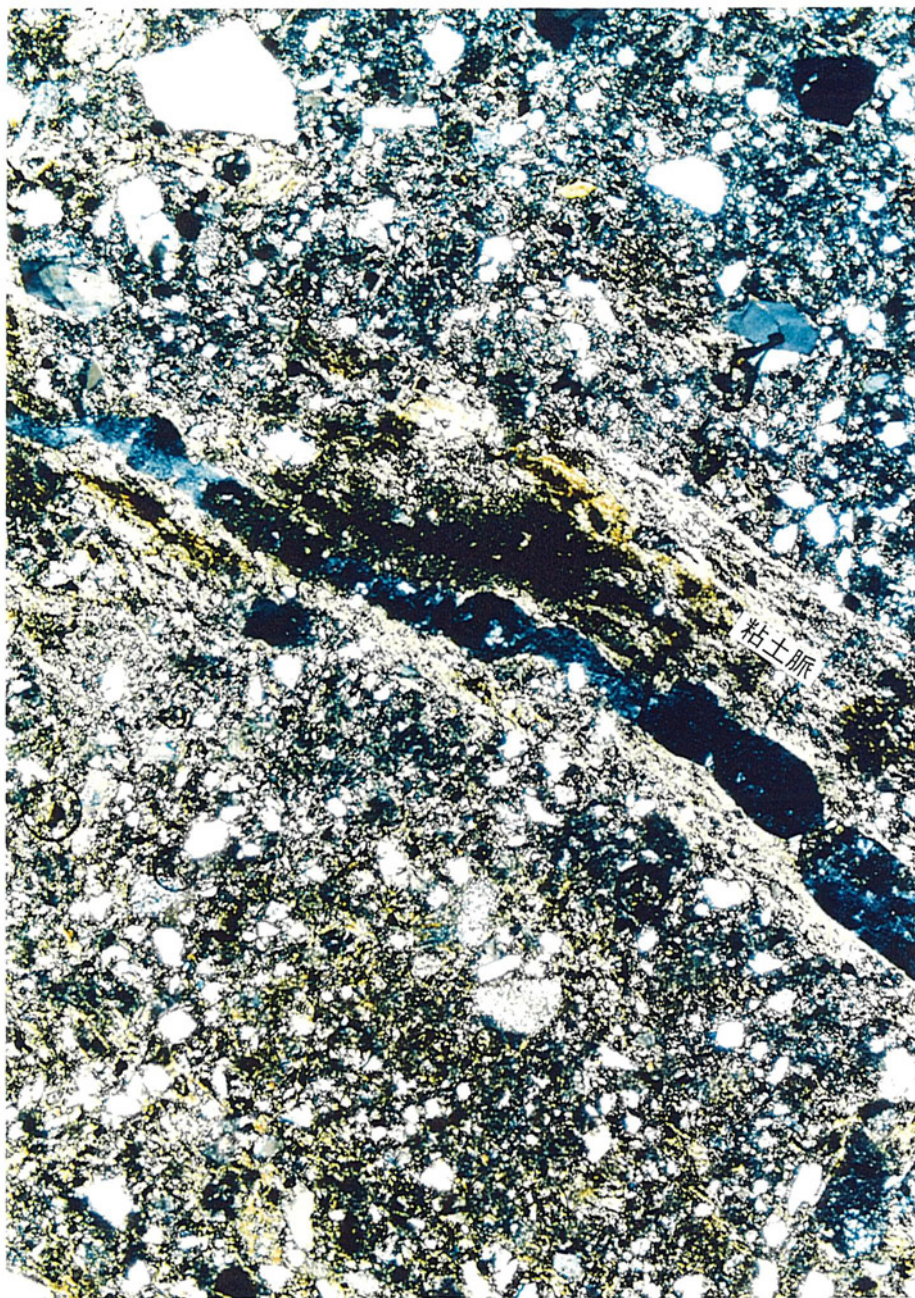


写真- 27 粘土脈の偏光顕微鏡写真.細脈は粘土鉱物からなる.粘土脈の幅は約
1 mm.